

東日本大震災と 明治大学の取り組み

受講料
無料

2011年

11月26日(土)

13:00 ~ 16:15

明治大学駿河台校舎 1022教室

(リバティタワー2階)

内容 ● 講演者 1 : 東京大学大学院総合文化研究科教授 藤垣 裕子氏
『三大災害(地震・津波・原子力発電所事故)に
対する科学技術社会論による分析』

講演者 2 : 明治大学商学部教授 水野 勝之氏(明治大学震災復興センター副センター長)

『東日本大震災と明治大学の取り組み』

司 会 者 : 明治大学経営学部准教授 菊地 端夫氏

対象 ● 社会人・学生

(奇跡の一本松)

『東日本大震災と明治大学の取り組み』

2011年3月11日に発生し日本での観測史上最大のマグニチュード9.0を記録した東北地方太平洋沖地震は、東北地方、関東地方の太平洋沿岸を襲った巨大津波により壊滅的な被害をもたらし、さらには液状化現象や引き続く余震により、大規模な地震災害となりました。死者・行方不明者は2万人以上となり、ピーク時の避難者は40万人を超える規模となりました。被害額は、16兆円から25兆円と試算されています。また地震と津波による東京電力福島第一原子力発電所の原子力事故は、放射線物質の放出により周辺住民のみならず、国内に深刻な被害をいまだ与え続けています。東日本大震災は、地震による被害、津波による被害、原子力発電所事故の三大災害をもたらしました。

「想定外」や「未曾有」という言葉が繰り返されたように、今回の震災は科学技術のみならず、社会科学と社会の接点の在り方についても私たちに再考を促しています。今回の公開講演会では、社会科学を学ぶ私たち研究者、学生、市民が今後、どのような視点で東日本大震災に向き合い、そして復興へ向けた役割を研究と実践から果たしていくことができるのかについて、最初に科学技術社会論の立場から講演をしていただく予定です。その後、よりしなやかで強靱な社会を創り上げていくために、多くの社会科学系学部を有する明治大学が研究や教育を通じてどのように被災地支援に関わることができるのかについて講演していただく予定です。

2011年11月26日(土) 13:00~16:15

三大災害(地震・津波・原子力発電所事故)に対する科学技術社会論による分析

東京大学大学院 総合文化研究科 教授 藤垣 裕子

今回の三大災害の発生にともない、科学技術と社会との接点でいくつかの問題があきらかになった。とくに原子力発電所の事故関連では、公式発表の窓口の多さ、個人で情報発信する大学内外の研究者とメディア情報とのギャップ、専門家間の意見の相違、科学・技術的な事象を社会へ説明する際の「翻訳」や、必ずしも明確に答えが出せない段階で意思決定をしなければならない場面での説明責任などの問題がある。また、安全管理における「想定外」の意味、「想定」の功罪、技術への過信、今後のエネルギー政策を話し合う公共空間の設計などの問題も問わねばならないだろう。さらに、市民の手による放射線量の測定、市民の放射能リテラシー、放射能汚染の健康影響をめぐる科学コミュニケーションの問題なども生じている。本講演では、これらの課題を科学技術社会論の立場から論じる。また、国際科学技術社会論学会の2011年年次研究大会で「フクシマ」関連のセッションが複数組まれているため、それらからの示唆も適宜報告する。

東日本大震災と明治大学の取り組み

明治大学 商学部 教授 水野 勝之
(明治大学震災復興センター副センター長)

東日本大震災後学内にいち早く震災復興支援センターを組織させた明治大学の震災への取り組みは、広範囲で、長期的で、多岐にわたっているのが特徴である。特に、明治大学の長期的な取り組みの姿勢が示されているのは、ソフト面では、受講者に単位を付与する正規科目として「東日本大震災に伴うボランティア実習」を新設したこと、ハード面では液状化の激しかった千葉県浦安市に明治大学浦安ボランティア活動拠点を開設したことである。

前者の場合、学部間共通総合講座として設置したので学部を超えての学生が受講し、価値観を融合させながら日本の復興に対してさまざまな成果を生み出している。また後者の場合、ボランティア実習の受講生だけでなく、学内のボランティア学生、各ゼミの学生が活躍している。この拠点は、被災地浦安をサポートするだけでなく、東北をはじめ今回被害を受けた多くの被災地をサポートする拠点としても機能している。

本講演では、これらの具体的内容、取り組み方法、今後について論じるとともに、明治大学の震災復興支援の今後のありかたについても論じていく。